No.28
2006. 9. 01

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

●あれから…15年……1
●クメールシルクの光と陰……2〜3
●災い転じて福となす……4
●パキスタン地震現地報告……4
●台所から見るラオスの社会……5
●変化するネグロス……5
●コツコツ働く「マジカルバナナ」を見に行くの記……6
●ジャワ島中部地震復興支援……6
●ヨッコのグローバルeye……7
●おみやげ一杯 私のボランティア体験……7
●活動日誌……7
●INFORMATION……8

あ・れ・か・ら…15年

地球の木は今年7月、15周年を迎えました。これまで見守り支えてくださった、たくさんの方々への感謝と「さあ、これからもがんばろう！」の気持ちを込めて、いろいろな記念行事を予定しています。

今号では、設立当初から支えてくださっている会員の中から3名の方に、感想をうかがいました。

分野は違えど…つながっている

寺田　悦子

地球の木が15周年とのこと、私が一番古いメンバーだそうで、びっくりしました。正直何度も辞めようかと思いましたが、入会当時の一食カンパ運動を思い出して、生活クラブ運動グループの安心安全な食材を贅沢に口に出来る幸せな毎日に感謝する気持ちから、月に一食分のささやかな思いが役に立つなら、働ける間は続けようと現在に至っています。地球の木が15年続いているのは様々な分野の方々の支えがあり、大勢の皆さんの努力があっての事だと承知しています。機関誌や現地報告のニュースを拝見する度に、それぞれ頑張ってるなーと、私は今の仕事を楽しく頑張ることで、分野は違うけれど、これ又、間接的に支えになっていけるのかなと、勝手に思って毎日を過ごしています。これからも細々続けます。健康で働き続けられるように我が身をいといつつ…。会員の皆さんと共に世界の平和を祈りましょう。毎年カレンダーを楽しみに購入しています。

（福祉クラブ生協ワーカーズコレクティブ「オプティ」ケアマネージャー）

早いもので…これからも

岡村　順子

早いものでもう15周年ですか。当時、生活クラブの支部委員だった私は宮前平デポーの祭りに出かけ、「毎月、昼食代一回分500円のカンパで開発途上国の市民との交流・支援ができますよ！」と声を掛けられ会員になりました。

15年前の会報誌　創刊号、二号、三号

90年代後半、飢饉に見舞われた北朝鮮に米を送ろうという提案があったときは、あの北朝鮮になぜ支援が必要なのか悩みましたが、基本的な衣食住が保障されてこそ対等な議論ができるという意見に一理あると納得しました。また、昨年のパキスタン大地震では、組合員のカンパを地球の木・JVCを通して現地支援に活用し、報告会を開催することができ、神奈川に地球の木があって本当によかったと思いました。

地球規模で環境や食糧問題を考えるとき、持続可能な社会をめざすには、お米を食べる文化を持つアジア各国との連携は益々重要になるでしょう。会報やホームページを通して出される充実した情報をこれからも楽しみにしています。

（生活クラブ生協神奈川　前理事長）

色々なことがあったけど…活動から学んだこと

松本　陽子

15年前の記憶をたどってみました。エチオピアで飢饉が起こり、生活クラブ生協の理事会で緊急支援をすることになりました。その後、日常的に支援ができたらということで国際協力団体ができました。まず、名称を考えようということで、20人位集まりいろいろな言葉を自由に出しあい、二つの言葉を組み合わせて「地球の木」誕生です。

その後活動が始まり、支援地の実情が解らなかったり、会員が増えなかったりといろいろな困難にぶつかりました。そしてこの活動から学んだことは、世界には富める国、貧しい国といろんな国があり、その格差はどんどん広まっています。「本当の豊かさって何？」を考えながら、自分自身の生活を見直すことが、大事なのではと思います。

（三浦ブランチ代表　初代運営委員）

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 広報部 ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://homepage1.nifty.com/EarthTree

クメールシルクの光と陰

事務局　佐藤　葉

車と人があふれる
プノンペンの街中

紫・黄・ピンクをチェック柄にした、シルクのスカーフ。カンボジア・タケオ県にある職業訓練センターの女子生徒たちが織ったものである。

地球の木のオリジナルグッズが何か作れないかと模索していた時、事務局長の筒井が日本のNGO、「Love & Peace」(L&P)が現地NGO、VCAO (Vulnerable Children Assistance Organization)と協力して運営する、このセンターの活動内容を聞いてきた。織物を教えているのだが、販売ルートがなければセンター内にたまる一方という。では、その織物を使ってしゃれた製品を作れないだろうか。ハンドバッグやポーチなど、私たちのオリジナル商品が作れたら素敵、と「クメールシルクチーム」の夢は広がった。

そこで、今回現地の様子を知るために、6月の半ば希望を抱えてカンボジアを訪れた。

彼女は一家15人を織で養っている

織物のクラスでは、2、3人の子たちが黙々と機（はた）を動かしていた。乾季の終わりの一番暑い時期で、連日30度を越える。額から、首筋から、汗が滴る。

絣を織っている子は13歳ぐらいに見えたが、16歳とのこと。村の子は体が小さく幼く見える。栄養が足りないためのようだ。

初心者は縞柄から始めるが、横縞が斜めになっていた。縞柄が上達すると絣に進むそうだが、機にかかっている絣は、経糸がとんでいたり緯糸の目が不ぞろいなところがある。

同行した私の妹、斎藤真理は「この子は気づかずに織ってしまったのね。早く気づかせるようにしなければ売り物にならなくなる」と言う。真理は、織物を生業としている。長野の作家に１年弟子入りして紬と絣、それに草木染を教わり、在住している静岡県の特産である葛布も受注生産している。

彼女の染料は桜やケヤキの皮などからとり、ベージュや薄いピンクなど淡い色が多いが、訓練センターの織物の色は華やかであった。化学染料かと疑ったが、黄、ベージュには木の皮を、紫には木のヤニ、藍は木の藍を用いている。

訓練センターが建てられたのは１年前である。定員をはるかに上回る子どもたちが応募した。ここタケオはカンボジア国内でももっとも貧しい県のひとつで、女の子はお手伝いに出されたり、ひどい場合には売られたりする。お手伝いといっても、肉体的・性的暴力つきである。センターの合格基準は、困窮している家庭が優先とのことだ。センターの卒業生3人の聞き取り調査に同行した。乾いた田んぼのあぜ道をバイクで30分ほど入る。いずれも17～８歳の子で、2人は父親をなくしていた。残る１人の子の父親は少年兵時代に爆撃を受け、片腕をなくした。20歳を頭に3歳ぐらいの子まで13人兄弟である。どの家もヤシの葉で編んだ高床式である。

町では日干しレンガの家、次が板張りの家で、葉で編んだ家は農村の奥に見られる。隙間からちらと中をのぞいたら、布団と衣類のほかには家具らしいものはなかった。公務員の月給が月30ドル（ただしこれでは生活できない）。一方、卒業生が織った幅1.2m×長さ4mの絣は、70ドルで仲買人に売れる。織物で生活を支えることができるということだ。

趣のあるオールドセンター

高床式の床下、風通しの良い場所に機があった。そばの台の上で、卒業生がナイフでひもをはずす傍らで、7～8歳の妹が同じようにナイフを持ち、せっせとひもを切っていた。絣模様を出すためには、糸を紐でくくって初めにピンクに染める。紐を解くとそこが白く残る。次に別な箇所をくくり、緑に染めるというように、4～5回染を繰り返す大変手がか

かる作業だ。真理は、「小さな子なのに作業が速い！」と驚き、やはり手作業は子どものうちに覚えると上達が早いのねと感心していた。日本の織りの現状や時代背景の相違を感じたとのことである。

また、もうひとつ織物のセンター（オールドセンター）があり、こちらはDV（家庭内暴力）を受けた子たちの自立のために設けられた施設である。ここで染色を見学した。「洗う、染める、どれも水を大量に使うから、水がないタケオでの染色は厳しいでしょうねえ。水の確保が課題よ」と、真理は言う。タケオでは、生活用水は雨水に頼っている。

ゴミ山でゴミを拾う人々（プノンペン市ミアンチャイ地区）

タケオの貧しさは、水がないことに大きな要因がある。首都プノンペンの周辺はすでに田植えがすんでいたが、タケオに向かって南に下るにつれ水がなくなり、センターの周辺はからからに乾いていた。川がなく、雨も少ないので時には旱魃にもなるという。

プノンペン市内には水道がある。物が豊富だ。洒落たレストランも西洋風のカフェもある。そんな、小綺麗なカンボジアのレストランで通りを見渡していると、タケオのどこまでものどかな、しかし電気も水道もない貧しい村の暮らしとのあまりの格差に愕然とする。村の人々が、プノンペンに出れば豊かな暮らしができると錯覚するのがわかるような気がした。だが、市内に出ても仕事はあまりない。故郷を捨て、都市に出た人々が、仕事が見つからないときに行きついたのが、ゴミ山である。

プノンペンはずれのゴミ山へ行ってみた。180度の視界に、緩やかな丘が広がっている。ゴミでできた山である。赤い服を着て長靴をはいた女の子が、背中に袋を背負って棒で足元をつついている。 L&Pの松崎公則君に従い、どろどろにぬかるんだ道を行く。トラックが私たちを追い越した。トラックが止まったところが、「新しいゴミ」のある場所である。大勢の男女が缶やプラスチック製品などの売れるゴミを拾っていた。近くで飼っている豚の糞の臭い、下ろしたばかりのゴミの臭い、それに蒸し暑さの中で、帽子をかぶり、首にタオルを巻き、ゴム長姿で。

ゴミ山の子どもたちは皆明るい

プノンペンにある「VCAO」のオフィスにて説明をうける

この人たちは、ここで今日の食べ物のために働いている。子どもが拾うのはストロー類などの小さなプラスチック製品で、うまくすると1日1ドルになるそうだ。

小学校の低学年とおぼしき子どもたちが駆け寄ってきた。カメラを向けると、にかっと笑う。足元など気にせず、ゴミ山を駆け上り、遊ぶ。それを見る私たち。その私たちをちらちら見やる大人たち。生活することの重さ、その圧倒されるほどの現実がここにあった。

しかし、このゴミ山での生活から抜け出すのは容易ではない。ここに来る前に、故郷からの流出を止めることが切実に求められている。そこで、L&Pはゴミ山に来る人々の出身地の中でもっとも多かったタケオに、職業訓練センターを作ったのである。

カンボジアの絣の特徴

くくりを解く少女たち

カンボジアの絹の中でも希少価値のあるのは黄色い絹である。絹にまつわる民話によると、その昔、中国から渡ってきたものだという。黄色い絹（繭）がとれるのは、シェムリアップの北西に位置するプノム・スロクである。2～3平方キロの狭い地域に、10軒あまりの養蚕農家が集まっている。養蚕の担い手の女性は250人ほど。片田舎のためか、ポルポト時代でも村人の配置転換を免れたため、養蚕と織りが残った。

だが、国全体で見るとカンボジアの織物は廃れたも同然だった。戦後、各地で養蚕と織りの復興に力が注がれ、桑の木を植えること、繭の育て方などの基本から教えたのである。

タケオでは、職業訓練センターから現地NGOのオールドセンターまでの道の両側の家では、軒並み女性たちが機に向かっていた。タケオも織物が盛んである。絣の模様は村によって異なるが、タケオは花柄と菱形が特徴とのことだ。

もうひとつ、カンボジアには絵絣がある。人々の生活などを織ったものは寺院に飾る。仏陀や牛、寺院が織り込まれているのは葬式用の幟（のぼり）で、極楽を表すという。

カンボジアの織りは、綾織という玉虫色に光るのも特徴で、これは機の構造によるものである。光によって色が変わる美しい布である。

＊クメールシルクチームの仲間を募集しています。

Nepal

災い転じて福となす

2005年度に専門家に依頼してカイラリ郡、ラリトプル郡で実施した効果調査の結果がSOARSから送られてきましたのでお知らせします。前年度は、内戦の激化、非常事態宣言の発令、言論や集会の統制、物価の値上がりなどプロジェクトを阻む多くの要因がありました。しかし、SOARSスタッフ、カイラリ郡担当のアルジュン・チョーダリ、村の人々は一丸となって力を合わせ、知恵を出し合って、地域の人々の生活向上と自立のためのプログラムに真摯に取り組みました。

カイラリ郡では8クラスの識字教室が実施されましたが、マオイストの活動が盛んな地域に対する政府からの経済制裁があり、ランプ用の灯油が手に入らなくなるという緊急事態が発生しました。ところが、どんな時もSOARSは災いをプラスに転じるアイディアを考え出します。識字教室を中断し、役所に行くことすら怖がっていた村人たちを対象とした集まりを毎月一回開催して、アドボカシー能力向上のためのトレーニングを行うという決断をしました。今こそ村人たちが政府の提供する公共サービスについて知り、それを利用すること、政府に対して声を上げることが必要であるとSOARSは考えたのです。7回にわたるトレーニングには、延べ380人の参加者がありました。効果調査によると、回答者の44%が役所を利用するようになり、ポリオの予防接種をしてほしいと役所に対して要望を出した例もあったそうです。

ラリトプル郡で行われた女性のための起業家トレーニングには、近隣の女性グループ10団体から25名の参加者がありました。行政からの支援の受け方、銀行の利用法、マーケティングや商談のやり方を学んだ女性たちは「目からうろこだった！」と感想を述べました。
効果調査の回答者の56パーセントが過去4年間で収入のパターンに変化が見られ、それは野菜づくりと小さな店舗を始めたからだと述べています。

このように私たちの支援はネパールの人々に勇気と希望を与えていることが効果調査の端々からうかがえました。

（ネパールチーム　乳井　京子）

教育支援プロジェクト

Pakistan

現地調査報告　トイレ設置に奮闘中

震災から10ヶ月。私は7月7日から14日まで「JVC」が現地NGO「SPADO」に協力し支援を続ける、パキスタン北西辺境州バタグラム県の被災振興状況や支援活動を見てきました。現在は被災者のテント村もほとんど片付けられ、モンスーン・シーズンに入った山あいの村々では稲やトウモロコシが植えられていました。村の住居は一般に石積みに土を塗り込んだ壁、屋根は細い木などを葺きその上に土をのせています。横ゆれに弱い構造で、屋根は重く危険だと思いました。トタン板は村々にかなり配られているようで、それを使用したピカピカ光る屋根も目につきます。

4ヶ所ほど見学した小学校は、どれもコンクリートブロック造りのような建物が崩壊状態のまま残され、そばにユニセフなどの援助でカマボコ型テント教室が設置されていました。開口の少ないテントの中はムッとする暑さです。

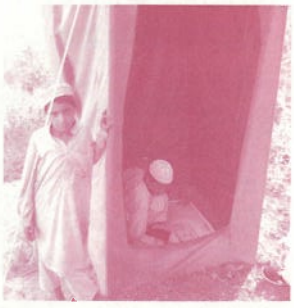
バタグラムの「JVC」事務所ではコーディネーターの藤井さん以外はドライバーを含め16人（5人は村に常駐）の現地の人たちが、水や電気の供給が不安定な事務所に泊まりこみ働いています。

現地では“トイレのNGO”として知られる「JVC/SPADO」の被災者支援は、対象範囲をバタグラム県全域に広げ、衛生環境改善のため簡易トイレの設置を進めています。トイレユニットは約15人に一基屋外に設置され、材料も初期の布製から耐久力のある鋼板製に改良されています。トイレ設置のために住民は、大きさ0.8m×1.0m、深さ3mの便槽にする穴を掘りますが、これがかなり大変です。また、ユニセフの小学校再開事業に協力し、小学校の簡易トイレ設置も行っていました。本格的な学校の再建には日本政府の援助も行われるようです。

今回の訪問では、トイレができあがるのを目を輝かせ見ていたり、設置済みトイレの床を丁寧に清掃する子どもたちの姿が印象に残りました。2006年7月14日現在のトイレ設置数は住民用－433基（うち鋼板製89基）、小学校用－29基、「JVC/SPADO」の支援活動は、今年の11月末まで継続されるとのことです。　（理事　米林　大作）

JVC：日本国際ボランティアセンター
SPADO：Sustainable Peace and Development Organization

パキスタン地震現地報告会第2弾
日　時：10月28日（土）
　　14：00～16：00
場　所：オルタナティブ生活館2F
　　オルタリアン
内　容：震災から1年の復興状況
報告者：下田(JVC) 米林(地球の木)
主　催：地球の木
協　賛：生活クラブ生協神奈川


トイレの清掃をする子どもたち

Laos

台所から見るラオスの社会

ラオスの村の中で私が一番好きな場所、それは‘台所’だ。村の噂話や、夫や子供の不満、天候や収穫への喜びや不安など、大きな薪で煮炊きする間になされる台所での会話はラオスの村人の暮らしを垣間見ることができる。

2005年6月にラオスの中部に位置するカムアン県に赴任してから1年がたった。私が担当している農村開発では、１年のうちの3～6ケ月間の慢性的な米不足、また乾季における水の確保が大きな課題となっている。これらの課題に取り組むため、米の備蓄制度である米銀行の設置や、幼苗一本植え（米を増産するための新しい技術）の紹介、浅井戸の掘削支援などを中心に行っている。

農村開発を担当していることから、村に行く機会はとても多い。ラオスの村は男社会だ。家族単位の決定事項（例えば、子供の就学や物の購入など）は女性に委ねられていることも多いが、村単位の決定事項になると、女性が関わることは非常に少ない。

「女性」「若い」というこの２つのキーワードは、日本ではプラスのイメージを持つが、ここラオスの村で働く際には必ずしも利点にはならない。「女性」で「若い」というだけで、村長や副村長など村の有力者（中心人物の8割は「男性」であり「高齢」）と対等に話すことがままならず、悔しい思いをしたことはこの1年間でも数え切れない。‘台所’はそんな私の村での避難場所でもある。一度、台所に入ると、そこには女性の世界があり、私もラオスの女性に負けず、最近の日本の事件を話題にしたりする。その何気ない会話の中から、ラオスと日本の思わぬ共通点を見つけたり、また、人々の助け合いの残るラオスの村の豊かさを改めて実感したりする。

ほんの少し前までは、‘村の有力者と対等に話すこと’ばかりを考え、悩んでいたが、台所に避難し、村の女性と話をするうちに、有力者たちの方が実は村の中では少数派であることに気が付いた。村の有力者（少数派）から出てくる問題がその他の村人（多数派／女性、子供、青年など）の問題を代表しているとは考えにくい。村は‘男性だけの社会’ではなく、女性や子供、青年、お年寄りも含め、多様な要素から成り立っている。「女性」「若い」という自分にとってマイナス点だと感じていたこの２つの要素が、逆により重要なことを私に気付かせてくれるきっかけとなった。今度は青年や子供などと話をするにはどうすれば良いのか、台所に代わる新たな場所を模索する毎日だ。

（JVC ラオス事務所　新井　綾香）

農民と交流する筆者（右端）

カムアン県　森林保全・自然農業支援

Philippines

有機農業に追い風か？

PAP21（People's Agriculture Plan 21 from Negros）*は、ベン神父の死後、理事会が最高決定機関となって運営されている。5月から雨季に入り、野菜の植え付けが始まり、農業指導員も地域での活動に忙しい。

ヘルベッチャ教会の朝市のほか、毎月曜日にバコロド市中心部にあるプラザ(広場)で「ファーマーズ・マーケット」を始めた。これは農民自らが作物を運び、消費者に対面で売る試み。消費者の反応も「新鮮！」と好評で作物はすべて売り切れ。農民も手ごたえを感じている。

一砂糖きびに頼らない自立した農民一ベン神父の思いを農民は継承してがんばっている。

フィリピンでは、昨年「有機農業推進のための大統領令」が出されて、有機農業を推進しようという動きが活発化している。有機農業を目指すPAP21農民には追い風かもしれない。

(日本ネグロス・キャンペーン委員会事務局長　小林　和夫)

＊PAP21：日本ネグロスキャンペーン委員会と協力してネグロスで活動している現地NGO

レッツ・ゴー！ファミリープロジェクト

◆地球の木サロン、好評です◆

今年スタートした地球の木サロンは、関内の事務所を知ってほしい、ここに集って会員どうしのつながりを深めたい、また事務所近隣の人たちにも「地球の木」を知ってほしいという願いから生まれました。文化活動を中心に、今後講座を増やしたいと考えています。開講講座は●ハングルに親しむ●Tea & Talk●エッセイ修行●楽しく書こう●あむ●すぐに役立つ健康ミニ講座●アロマテラピーの6講座です。広報チームからも5人の仲間がエッセイ修行講座に参加しています。同講座はエッセイだけでなくルポルタージュ、小論文などいろいろな文章の書き方を学びます。以下はメンバーの一人の課題ルポルタージュです。

誕生いらい7年

コツコツ働く「マジカルバナナ」を見に行くの記

梅雨空の6月17日、JICA横浜のビルに汗だくでたどり着く。恐ろしく分かりにくいビル内をさらに歩き回り、新米記者の頭の中の気温はますます上昇する。しかし、セミナー会場のドアを開けるとそこは別世界のよう。基調講演に聞き入る40人位の人たちがかもしだす空気は涼やかでさえあった。

この「国際理解教育・開発教育指導者セミナー」は県内の先生たちを主な対象に開かれ、受講者は、ふたつの「参加型教材体験ワークショップ」を体験した。

そのひとつ地球の木オリジナル教材「マジカルバナナ」のワークショップ。ファシリテーターはゆっくりバナナにまつわるクイズで導入していく。一同は素直に引き込まれていき、サモアでシニアボランティアをしたという人が、バナナがどんな風に育ちどう実をつけるかを話すと、クラスは一段と盛り上がっていく。

気持ちがバナナに集中したところで2本のバナナが配られ、においをかいだり指で押したり。そして目の前にある2種類のバナナ、プランテーションで大量生産されたものと、ネグロスの山で採れ民衆交易で日本にやってきたものとの違いや歴史を知る。

続いてのロールプレイでは、大農園で働く一家と、バナナ村で暮らす自営農民の一家、そのバナナを日本で買って食べる親子の様子を短い劇にしたものをクラス全員で演じ、疑似体験する。

このあたりになると少し騒然とした雰囲気になる。それぞれの年代、立場、仕事柄などから、さまざまな反応や意見がわき起こるからだ。安い方を買うのは当たり前／買う時に生産者のことは思わないのが普通／いや自分は商品を手にとるとこれでいくら生産者が稼げるのかいつも気になる／商社マンと地主が悪い、これでは殖民地時代と変わらない／果ては百円ショップのこと・サッカーボールにまつわる児童労働についてなどなども。

結局ワークショップは一種渾沌としたまま、バナナを一口ずつ食べておしまいになるのだが、インタビューしなきゃと食堂まで追いかけていくと、まだ話し合いは続いていた。「マジカルバナナ」は地道に、出会った人に考えるきっかけを提供している。

以下は、旅先のインドで開発教育の大切さを痛感し、会社をやめて教師となった20代後半の女性の感想だ。「バナナのクイズはとても興味をそそられた。ロールプレイは参加者が自分で台詞を作ったらいいのではないかしら。子どもたちは案外面白がって台詞を考えるかも」。こんな先生のこれからに期待せずにはいられない。

（広報チーム　斎藤和子）

◆ご支援ありがとうございます◆

インドネシア、ジャワ島中部地震被災者復興支援の内容が決まりました

2006年5月27日インドネシア　ジャワ島で発生した地震では、5,700人以上が亡くなり、約43万人の人々が家を失うという被害を受けました。（インドネシア社会省発表）

被災地では現在、壊れた家の片付けは進んだものの、いまだ本格的な住宅復興は手つかずで、人々はとりあえず手に入る材料で仮設の住宅を建てて日々暮らしているような状況です。病気の蔓延をふせぎ、人々が健康で元の生活を取り戻すためには、生活インフラ（特に水回り）の復旧が欠かせません。皆さまからの募金（7月31日現在　74,700円）は、日本国際ボランティアセンター（JVC）を通じて現地のNGO　ディアン・デサ財団がおこなう水供給、衛生改善活動（井戸、トイレ、水浴び場の復旧）などに使われます。

倒壊した家（写真提供JVC）

ヨッコのグローバル eye

＊＊＊
ほっとけない　世界のまずしさ

ホワイトバンドその後

横川　芳江

最近、ホワイトバンド「ほっとけない世界の貧しさキャンペーン」の成果について、様々なところで検証されています。皆様の中にはもうすでに「どこかにいっちゃった」バンドもあることでしょう。300円のバンドは日本国内だけで450万個、13億円以上売れ、キャンペーンの活動資金として5億円が計上されました。企業と組んだことでスポーツ選手や芸能人などが参加し、それまでアフリカやNGO活動などに関心のなかった多くの人を巻き込みました。

一方、本来の目的である「貧困問題の解消に積極的に取り組むように各国政府や国際機関に訴える」という提言活動(アドボカシー)が買ってくれた人にどこまで理解されたか、また実際にどこまで達成できたのかなど疑問視する人もいます。また、「企業に利用された」と、とる人もいます。

様々な批判を乗り越えて、今、第二段階として「アドボカシー」を前面に出した活動が展開されています。5億円の資金を「アドボカシー」活動への助成として活用、2008年日本で開催されるサミットへの提言など目的をはっきりさせて取り組んでいます。また累積債務の取り消しやODA(政府開発援助)の増額などを各国政府に約束させました。

何にもましてバンドを買うという「行動」をした人々がこれだけ参加した事実、新しい運動としての可能性も見いだされました。単なる社会現象としての「ホワイトバンド」に終わらせるのではなく、世界を変える力を持つ継続した運動として支えることが必要です。

（地球の木は「ほっとけない世界の貧しさキャンペーン」の賛同団体です）

ブランチから～

おみやげ一杯　私のボランティア体験

池本　麻沙

なんぶブランチのメンバーたちとアラビア風焼そばを売る（左から3人目が筆者）

7月30日、真夏の太陽がじりじり照り付ける日曜の昼下がり、JR港南台駅近くの広場で開催された港南台国際協力まつりに初めてボランティア参加して、なんぶブランチのアラビア風焼きそばの店のお手伝いをしました。

最初はなかなかお客さんが集まらず、駅前まで行ってビラ配りしたり、お客さんの呼び込みをしました。自分の配ったビラを見て来てくれたお客さんがいるととても達成感があり、そのうち夕方にかけてだんだん繁盛してきてお客さんにも美味しいと喜んでもらえたのがとても嬉しかったです。また、露店を経験したことでお金を稼ぐことの大変さやお金の価値が身にしみてわかり、なんだかお金を使うのが惜しい気持ちになりました。

今回のお祭りでは、地球の木の色々な方と交流ができ、貧しい国の現状や文化などについて色々なお話を聞けました。中でも、パキスタン地震の調査にいらした米林さんのお話の中でパキスタンの女性は結婚するまで男性に素顔を見せないという文化は、私には想像もつかないことだったので驚きでした。他にもインドネシアの踊りや唄、世界の色々な食べ物などたくさんあり、ちょっとした国際博覧会のようで楽しかったです。世界を身近に感じ、異文化を少し理解でき、お金の大切さを実感した一日でした。次回も是非参加したいです。　（千葉県在住　会員　19歳）

活動報告（6月～8月抜粋）

6月 3日　フォーラムアソシエ総会出席
3~4日　あーすフェスタ参加（本郷台）
5日　マジカルシュガー教材作成ミーティング
10日　地球の木サロン「アロマテラピー」「エッセイ修行」「Tea&Talk」
13日　第1回理事会
15日　マジカルシュガー教材作成ミーティング
16日　第1回ブランチ連絡会
17日　鎌倉女学院国際セミナー「ネパール・タルー族の家族ゲーム」
JICA横浜教育指導者セミナー「マジカルバナナ」
20日　鶴見高校出前講座「マジカルバナナ」
国際協力NGOセンター総会出席
29日　桜井尚武氏講演会「私たちの暮らしと森林」（ラオスチーム）
29日~7/5　「南北コリアと日本のともだち展」（東京都児童会館）
30日　地球の木カフェ（オープンオフィス）
横浜NGO連絡会NPO設立総会
ユースクラブミーティング「自分の人生にとって大切なもの」
7月 1日　地球の木サロン「エッセイ修行」「ビデオ講座その1」
3日　「ラダック～懐かしい未来」を観る会（地球市民チーム）
マジカルシュガー教材作成ミーティング
7日~14日　パキスタン地震復興支援現地調査
8日　地球の木サロン「アロマテラピー」「Tea&Talk」
かながわ国際協力フォーラム分科会「女性」を担当
13日　第2回理事会
14日　第2回ブランチ連絡会
15日　地球の木サロン「ハングルに親しむ」
18日　マジカルシュガー教材作成ミーティング
20日　マジカルシュガー教材作成ミーティング
24日　地球市民教育学習会（講師磯野昌子氏）
25日　里親支援報告（るしな代表松本氏来訪）
29日　地球の木サロン「ビデオ講座その2」
29・30日　港南台国際協力まつり参加（なんぶ）
8月 3日　高校教育会館夏季講座「マジカルバナナ」
7日　マジカルシュガー教材作成ミーティング
8日　第3回理事会
11日　第3回ブランチ連絡会（ﾊﾟｷｽﾀﾝ報告を聞く夕べ）
12日　地球の木サロン「アロマテラピー」「ハングルに親しむ」
19日　地球の木サロン「Tea&Talk」
27日　つるみオープンカフェ参加（とうぶ）

おかげさまで地球の木は今年15歳！
15th anniversary
EARTH TREE

◆地球の木15周年記念企画◆

●支援地訪問ツアー・モニター大募集

募集人数：2名
訪問先：・ラオス(11/15～11/21)
・フィリピン（12/12～12/17）
・ネパール（2007年1/4～1/10）
応募方法：希望訪問地を明記の上、800字程度で志望理由をお書きください。
応募締切：10月10日（火）必着

＊詳しくは同封のチラシをご覧ください♪

● 会員アンケートにご協力ください！
会員の皆さまの声をお伺いします。切手不要ですので是非投函してください。抽選で6名様に、まぁじょらむカレースパイスをプレゼント！
投函締切日：10月15日（日）（当日消印有効）
アンケート結果・プレゼント当選結果発表：12月会報誌

●15周年記念イベント予告
講演会＆パーティー　～乞うご期待！
「食を通して持続可能で豊かな生活を考える」
＊詳しくは12月の会報で！
日　時：2007年2月3日（土）
会　場：ZAIM（予定）（関内駅徒歩5分）
講　師：大谷ゆみこさん（食デザイナー・「いるふぁ」代表）

第2回 日韓地球市民教育交流ワークショップ

昨年に引き続き、韓国のNGO「地球村分かち合い運動」のメンバーと「持続可能な開発」をテーマに地球市民教育のワークショップを行います。
日　時：11月11日（土）10:00～17:00
会　場：JICA横浜国際センター（桜木町駅徒歩10分）
参加費：無料
＊通訳・アテンド・11月10日の「日本のお宅訪問」の受け入れ先ボランティア募集中。この機会に韓国の方とお友達になりませんか？

グローバルフェスタJAPAN2006 「食」から考える・地球しあわせ計画

全国のNGOが集まる一大イベント。日比谷公園に元気な声が響きます。地球の木はグッズ販売・スタンプクイズラリーで参加します。
日　時：9月30日(土)、10月1日(日) 10：00～17：00
場　所：日比谷公園
主　催：グローバルフェスタJAPAN2006実行委員会

横浜国際フェスタ2006

東京のグローバルフェスタに行きたいけど遠いという方は、こちらを。地球の木はグッズ販売します。
日　時：11月18日（土）、19日（日）10：30～17：00
場　所：パシフィコ横浜　展示ホールA（桜木町駅徒歩15分　みなとみらい駅徒歩2分）
主　催：横浜国際フェスタ2006組織委員会

会報誌モニター募集！

一年間会報誌についてご意見いただける方を募集します。9月・12月・3月・6月の会報誌発行後に、ご希望の方法（FAX・メール・郵送・電話）にてアンケートにご回答いただきます。
募集人数：10名程度
応募方法：地球の木事務局までお申込みください
応募締切：10月15日（日）
モニター終了後、懇親会を行います。さらに支援地グッズをプレゼント。

右側のインフォメーションの詳細は同封のちらしをご覧ください

今年も地球の木カレンダーを販売します 「アジア育ち」　写真：管　洋志

今年のカレンダーは少し小さく軽くなりました。
穏やかなアジアの風景を1年間お楽しみください。
1部1500円。送料310円。

秋です！『地球の木カフェ』です

オープンオフィス「地球の木カフェ」。今年の秋は、カンボジアの絣などを展示販売します。
日　時：9月26日（火）11：00～18：00
場　所：地球の木事務所

ラオススタディツアー

ゆったりと時間の流れるラオスの豊かさを体験しませんか！
日　程：11月15日(水)～11月21日(火)
内　容：・JVCラオスプロジェクト（森林保全・農村開発）の現場を視察
・村にホームスティして村人との交流
・世界遺産の都市ルアンバパーンを訪問し、
・ラオスの歴史と文化に触れる
費　用：17万円（予定）

ネパールYOUTH交流スタディツアー ネパールの若者たちと未来を語ろう！

日　程:2007年2月11日(日)～18日(日)
訪問地：カトマンドゥ、ラリトプル、ナガルコット
費　用：17万円（予定）
内　容：ユースとの交流、学校訪問、ホームスティ、市内観光
申込締切：12月10日（または定員10名に達し次第）
国際交流基金の市民青少年交流助成を受けているため、参加しやすい費用となっています。この機会にぜひ参加しませんか？

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど

R100 この印刷物は古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK 環境に配慮した「大豆インキ」を使用しています